

古今著聞集

七

記和文

號 83

册 20册内

文庫



古今著聞集卷第七

能書 卷八



元禄文庫

尺牘の書流八千里に面固まりやと下凡六文
 脚れまごころ何らつた書跡の響る及勢のいよほ
 然るも人言ひた一字の記紙はとくと海に流
 代の不海をさつたりあく乃藤能の中よ手紙
 中よとれまごころあり
 藤能天皇と弘法大師とつたり作中記をたつそ
 せ終ひるりのあつ時中平あまご取知させ終ひく
 大原よんせりしせらまきせりそ中よ手紙の一巻

古今著聞集

卷七

大内記小野美村水の二門ハ但馬守播磨邊勝を
 勅成好く言ふ所の點とく毎より東西二門ハ勝成
 大内記のせありし御もる御ともや道風下ハ勝
 のせ終る新成入て難じていひる勝美極門を
 回廣し朱雀のハ朱雀のハ略頭よはつりてわざ
 上御もる程もやがて申風してありありとて
 異つるよはつりての御もるもはつりて
 寛弘年小成成は美極のハ新の字と終飾とて
 よ一言旨と美りする所のハ弘法大師の尊像の
 小帝花の具瓜さげし警免して美文とよまれ

この件明文ハ江以言そ書つりて

恐拘釋明詔之朝章今蒙明詔而款下
 軍則疑有贖聖詔冥謹文輝聖跡予將
 圖筆亦恐拘釋明詔之朝章晉退漸心
 胡尾失歩伏乞尊像示以許否若可許
 可請者存痕跡而係粉墨者不許不請
 者隨形勢而廻思慮王事靡盬監盡於
 世尚卿食

中ぞわねく作りする比門とも或ハ焼失する
 願傍してハ比門に安嘉待賢のそ作りする実

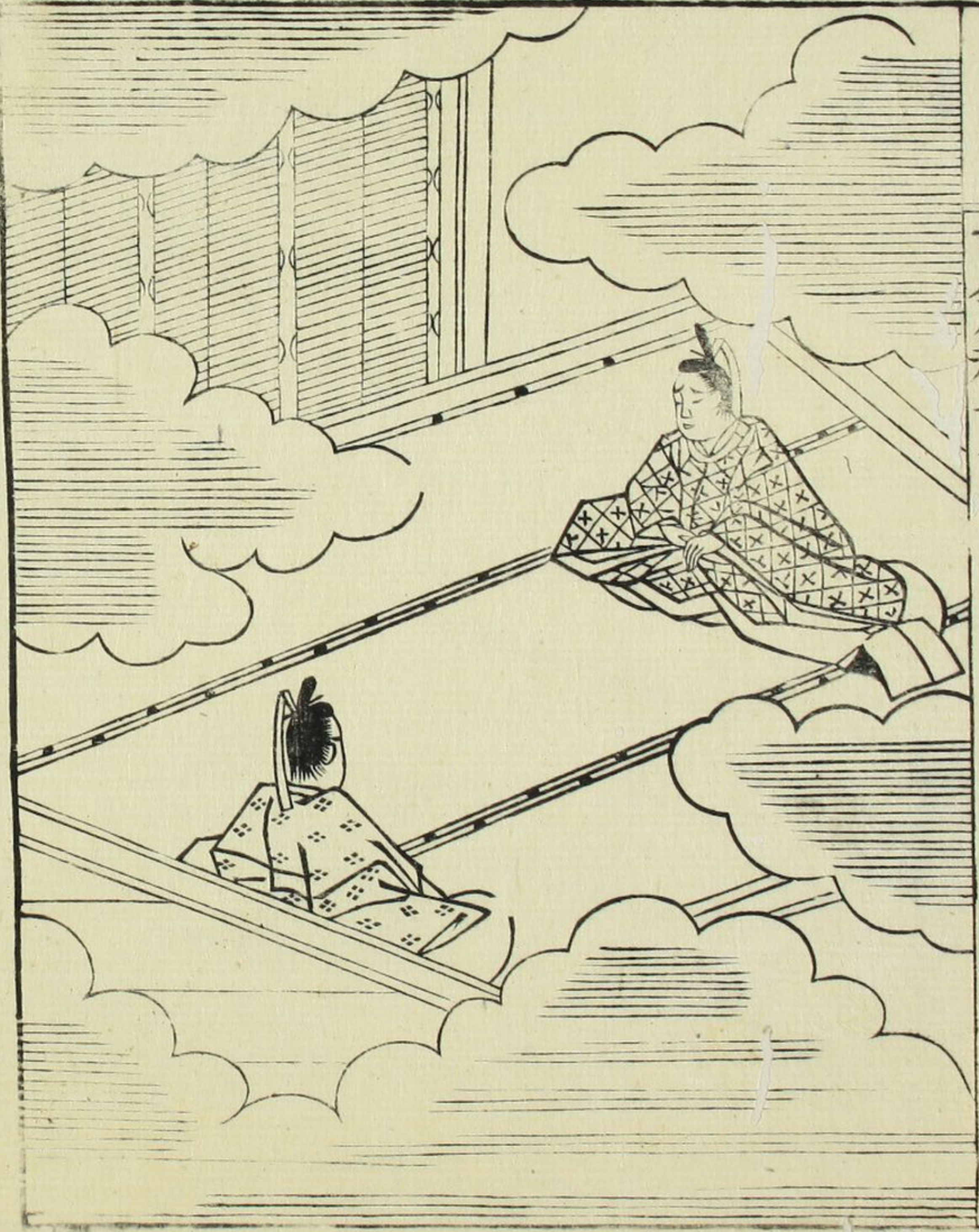
やびあまのつれなきにびく一人のたのむもそのつれなきに
かりきり事なり

延壽の解主能酬るは建志の時道風下り頼
書あつてはは作れぬ鳥二牧と結らせきり二牧ハ
南大のつねのあつたの料と馬系も振より結して是れ也
物定まされば作よとてはひくも秩よまへてはひくせ
づりきり成言よ書する南大のの料なるは成言と
草花字の解とも結の門はこれなりきりる風をそ
んてわくしは受てまをそくも結を成言の解は
あまのつれなきにびくを結る敷通ふもひくく日也

のあつてありてこれなるゆゑにわくは結する
ひかりはそれ成言なりなりなりなり
知是院入道有法性有あく久業の法より法中心
よりばわくしはひきりる時法性有あまのせ結する
きりふみ結みなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
百家のを結ひくはふ物書して結してなりなりなりなりなりなり
一は結するを結して是れなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
中よしらりのつれなきは業法を結して是れなりなりなりなりなりなり
為珠とてはなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり
つものを結するなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

室おろしき人かぐて室落の物もせりしぞ
 大納言の人の着衣と信状をれ法師はま
 かり父を志すごりされが母のさあしく解あてせ
 たるに乳母法師よりして信あまれち信ふあて
 名と大納言別あそそのひたるあらけりしを信
 名のりし一件の信あのおお務書とてあてて
 斗のあてあてしれかそとてりきりて書きれ
 信長大納言別あそそのひたるあらけりしを信
 文字これとて斗のあてあてし大納言大別あ文
 字れとて信うせぬとて信あ信信とんとりて書き





けり侍ふうも屋人ておと人の筆紙せびい
 うまうとあはれんしかふさあひなれんが
 筆紙あたわらけりく瀬うせん出所の盡る
 ん別えりての點もさへんてそほもあらめ
 かごころもそほのさう附りやの文字の上はさめ
 てあはれんせん何の難うあらんあはれ御あはし
 ら紙はれまう一林とて紙よさそそそそゆり
 そ時紙成とれらてあはれ地紙とて文字の上
 とめてかりか紙紙よ次の自像は雷電あひら
 きて氣とまそとぞとれ雲紙流ひく只りやのあう

おきてよりゆゑのまゝにわかれぬとてわく
 彩のあつし事なれよとていひぬれん
 うらなきてまじもあつたつらげん
 も清くすつさるるをいふ事おわくは
 さりげぬりやいひくのもる程よ
 大胸突別あ天てん之のふぢりて
 法ほつ源げん房ぼうが持もち佛ぶつををとと樂がくををとと導どうてて後ご終しゆうの
 道どう隔かくととててるる法ほつへへととをを海かい書しよへへにに入いるるののお
 へ後ごのの秋あき好こう樂がくををとととと字じ成せいととててくくららの
 されぬ事とてかたけの情よ打とていふこと人地

姉善天を以てあまのついでに帯おは
 て事おは成法とるおまうへ名付とる
 中なかんが為小建者三年八月十日
 終のゆいじつれうをまゝに終の日
 なるがも法とるにたつとてまゝに
 とるがも法とるにたつとてまゝに
 世にれりおまの神海とておまげり
 版おまのついでに法とるにたつと
 なるがも法とるにたつとておま
 入けて法とるにたつとておま

新編

新編

伊房とてありきるもいざよひ申さるる日たの
非のふ然たよりて出給ふといふ歌を二枚うとて
おとせしりきれば今今うのむらじゆもたをれば
いふあるあうあんぞんといふよりきり程お障も
とせ居てのらとふ年月をとりてそのおふらあ
よりつゆ程をおきしてまひせきさる時これ歌
とふ書とといふといふは皮障の子孫の中より
め候とまての障書とけり歌ありてし知れ
とまされはこれよりこそ非とよりさるひく有きれ
より候んとおくおのひき

ひり一依と理夫氣候とてこのむと神をらにみら
あて候とれ三徳の神の徳宣とわりてこの社の歌
かききありきるを同出とよりきり
弘法大師の筆紙とふとて人の名のおに持たお
の是よとてふて一箇り書書の字紙とかききり
とて又筆紙と書とてやうな紙とてやうとて紙と
とて紙り

御道 中九

御道とてあはれそのなまらしくよひられりふんこ推古天皇

皇十年百餘年より曆中天文地理方術書と
 まりてよりびうこる所ありし傳へ今よこゆゆ
 かりし中ふ秘術を成りて奇異多
 くのゆかりくさるるよのゆかりと

三日月の
 能明醫作也の武士教が下系秘して伝るに
 八月一日南終より早丸と名なりきるに由ゆと
 小名へきんういりあつとて能明ふうと
 せられしを能明うとていふに丸よ毒をさ
 ぶじとて一丸なりやうか持せられ毒を強

まゆりし中ふ秘術を成りて奇異多
 くのゆかりくさるるよのゆかりと
 三日月の能明醫作也の武士教が下系秘して伝るに
 八月一日南終より早丸と名なりきるに由ゆと
 小名へきんういりあつとて能明ふうと
 せられしを能明うとていふに丸よ毒をさ
 ぶじとて一丸なりやうか持せられ毒を強

子あくありし海があのみをれうせ給てあつてえ
 大船とくたふ長一信よりうてえ下北権をう
 給をゆゆく桐やまよりあつてい事成かば
 うら給て桐成あひく圓あつて去給ひあつ
 ともうあつてあつてあつてあつてあつて
 あり給てうてあつて

後者船内少船中宿まきるに法陽坊を建と別伏
 ともれまに毎日あつてあつてあつてあつて
 法陽坊少船中宿まきるに法陽坊を建と別伏
 その少船中宿まきるに法陽坊を建と別伏

在建とありてうてあつてあつてあつてあつて
 うてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 船の内よりののとくあつてあつてあつてあつて
 ちばあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 えんあつてあつてあつてあつてあつてあつて

古今著聞集卷之七終



